

権徳輿の贈婦詩について

河 内 昭 円

夫が妻に詩を贈る。自然な行為である。行役に別離を余儀なくされる。病を得て不安がつのる。難関を目前にして誓いを立てる。僥倖に深い喜びを覚える。佳節に逢うて一家の団欒を賀す。同穴を期す。夫婦の恩愛に疑いのないところ、贈詩の機会は随所にあつた。かくて作られた詩は、多く「贈婦」・「贈内」・「寄妻」などと題される。これらの詩題の上部に、詩作の契機を加え記すものもまた多い。一般に女子の作のこにちに残るものは少ないが、贈詩を受けた妻がこれに答えた詩篇もまま現存する。妻から先に詩を贈呈するのもまた自然な行為であつた。それらの詩の現に存するものもある。

中国詩の変遷のなかで、夫妻酬贈の作は古い歴史を持っている。梁・陳の間のひと徐陵が編纂した『玉台新詠』十卷は艶詩の集成であるが、これをひもとけば五言詩の成立初期に属する作品にその作を見ること、歴然として分明である。開巻第一に前漢蘇武の「留別妻一首」があり、次いで後漢秦嘉の「贈婦詩三首」とこれに答えた秦嘉の妻徐淑の「答詩一首」が続く。『文選』卷二十九にも載せる蘇武の詩が、後人の擬作とするは衆人の目するところであるが、秦嘉の作とともに古い時代の詩篇であることに問題はない。以降、西晋の潘岳・陸機・陸雲・賈充・梁の徐悱・劉孝威など多くの歴代名士に夫妻酬贈の詩がある。このうち賈充の作は賈充と妻李氏との連句三首であり、特異な形態を持つがいまは詳述しない。徐悱の詩には妻劉令嫗の答詩二首

が付されている。

「贈婦詩」また「贈内詩」、あるいはこれら以外の別の称呼を用いてもよい。夫が妻に示した詩がかく連綿と続く系譜を見せる以上、それらの詩は一つのジャンルとして把握されるべきである。唐詩に至ってもおのずから多くの詩人にその作を見る。しかし、贈婦詩を一つのジャンルとして把握したとしても、自然詩人また田園詩人、あるいは辺塞詩人といわれるよう、「愛妻詩人」または「愛情詩人」、あるいは「家庭詩人」の名をもつて冠せられる作家を見出すことは困難である。多くは一首・二首、そして三四首を見るのが通例であって、しかもそれらの詩をもつて詩人を特徴づけるほどに贈婦詩が大きな位置を占めることがないからである。

唐代のよく知られた作家にあって贈婦詩を例外的に多作した詩人は、李白と白居易である。贈婦詩は、贈婦・贈内・贈妻・寄内などの語を詩題に用いるものだけに限るわけではない。草花や樹木を詩題に用い、それとなく植物を詠じながら、じつは妻への思いを寄せたものもある。したがつて厳密にその詩数をかぞえるとすれば、詩人の全作品をこまやかに点検しなければならない。いま李白について、わたくしにはその用意がないが、一読してすでに十首をこえた。白居易もまた同様である。李白には生涯に四人の妻があつた。あるものは死別し、あるものは離縁した。^①一人の女性を生涯愛しつづけたというわけではないが、放蕩無頼を強く印象づけ、豪氣脱俗の風をもつて鳴るこの詩人にも、女性に対するこまやかな愛情を示す詩が残っている。白居易は晩婚であった。三十七歳になって弘農の楊氏を妻に迎え、生涯一人の女性を愛しつづけた。平岡武夫氏はその愛妻に贈る詩を解き、白居易の家庭的な心温まる側面を指摘された。「まさしくよき家庭の主人である。」とも述べられた。

権徳輿の詩文が読まれ論じられることはまれである。^③南宋の嚴羽が「権徳輿の詩は、却つて^{はなば}絶だ盛唐に似たる者有り。」(滄浪詩話 詩評)と述べ、「権徳輿は或は韋蘇州・劉長卿に似たる処有り。」(同上)と書いて一定の評価をあたえているにもかかわらず、李白や白居易、杜甫や韓愈、王維や柳宗元とは比較の対象になり得ないほどにまれである。したがつて、從来の文学史上にその存在の影はうすい。またしたがつて、この中唐の文人政治家が、おそらくはだれよりも、贈婦詩の多作家であることも知られていない。四部叢刊初編集部が納める『權載之文集』は本集五十巻、補刻一巻、校補一巻からなり、詩は第一巻から第十巻までを

占める。その第十巻は今体古体すべて三十二首を収載するが、大半は妻に寄せた詩であり、あるいは妻を意識した作である。第十巻を除く他の巻にも贈婦詩は随所に散見する。これはまさしく特異なことといわなければならない。

二

權徳興、字は載之。^④肅宗の乾元二年（七五九）に生まれたときには李白（七〇一～七六二）・杜甫（七一二～七七〇）の大家はなお在世したが、もとより世代を異にする。白居易（七二七～八四六）には先だつこと十三年の先輩である。本貫は天水略陽（甘肅省秦安県）の人であるが、生まれたのは江南の潤州丹陽県（江蘇省鎮江県）であった。父は權皋、母は名族の隴西の李氏である。これよりさき、父の權皋は安祿山の辟召に応じてその属官となつたが、祿山の謀反を予知して脱出し、江南に居を移していたのである。

代宗の大曆二年（七六六）四月十四日、中原での大乱がようやくにして終息して間もなくのこの日、權皋が亡くなつた。權徳興の墓碑を書いた韓愈は、權皋の卒年を記さず「（權徳興）七歳にして貞孝公（權皋）卒す」（韓昌黎集卷三〇 唐故相權公墓碑）と述べる。權徳興の生年から起算した七歳は、代宗の永泰元年（七六五）にあたる。權皋の墓表を

書いた李華は、權皋の卒年を大曆元年（七六六）としたのち、七歳の子どもがあつたと述べている。^⑤ いずれも齟齬するところがあつて定まらない。ここは權徳興自身が書いた「先公先太君靈表」（集卷二六）に「先公、大曆二年、歲は丁未に在り、四月十四日、代を潤州に棄つ。」とあるのに従うのが妥当である。干支を有する記載はこの資料に限られてゐる。ともあれ、權徳興は幼年にして孤児となつた。不幸であった。

權氏は寒族である。唐朝にいたつて、名を成し威を振う者はだれもいなかつた。權皋が安祿山のもとを逃れた行為は、のちに世間の話題となつて名譽を得たが、官は安祿山の属官になるほどのものしかなかつた。^⑥ 寒門の子弟にして利発なものが世に出る方途は、進士科の試験に合格して官界への足がかりをつかむのが通常の過程である。父の權皋も天宝七年（七四八）の進士及第者であった。しかし、權徳興はこれを受験していない。幼年にして孤児となり、弱年にして一家の長とならざるを得なかつたことが、その余裕をうばつたのであろうか。

權徳興は早熟であった。韓愈の碑文は「公生まれて三歳、四声を変ずるを知り、四歳能く詩を為る。」と記す。四歳で詩を作り得たという記述にはいささか誇張を感じざるを

得ないが、早熟聰明であった事実は疑うべくもない。『旧唐書』卷一四八の本伝には「十五にして文数百篇を為り、編して童蒙集十巻と為す。名声日にひに大なり。」とあり、十五歳のときすでに『新唐書』芸文志にもその存在を記録する『童蒙集』十巻の著述のあつたことが明らかである。成人してのち、徳宗の建中元年（七八〇）、韓洄が淮南黜陟使となつた。韓洄は父権臯の友人であつた。権徳輿は辟かれてその従事となり、試秘書省校書郎を受けられた。「秘書省校書郎」に「試」が付いてゐる。まだ見習いであつたが、ともあれ官吏としての生活が始まつた。聰明さと父の遺産が生活を助けたのである。

徳宗の貞元の初め（七八五頃）、二十七八歳のとき、こんどは江西觀察使李兼の召聘をうけてその判官となり、次いで府の監察御史に遷つた。王寿南氏の『唐代藩鎮与中央關係之研究』に收める唐代藩鎮總表によれば、李兼の在任期間は、貞元元年（七八五）一月より、貞元六年（七九〇）六月までである。府が罷むまで、権徳輿は李兼のもとで働いた。貞元八年（七九二）、三十四歳の正月、権徳輿はついに徵されて太常博士を授けられ、中央政界に第一歩を踏み出した。次いで左補闕に転じた。以降はきわめて順調に栄転した。統へ、宰相にまで登りつめる。

かく経歷するなかで、権徳輿の結婚の時期はいつか。その機縁はいづこにあつたか。ここでの一つの問題である。

権徳輿の妻は、博陵安平の崔氏である。博陵の崔氏は大族中の大族である。『新唐書』宰相世系表に挙げる崔氏の系譜は全て十房、宰相あわせて二十三人を記録し、『二十二史考異』卷五十にはこれに四人を加えている。権徳輿夫人崔氏の父崔造（七三七～七八七）もまた貞元二年（七八六）正月、給事中をもつて同中書門下平章事に拜せられ、宰相となつてゐる。⁽⁵⁾ この名望大族との婚姻は、しかし、権徳輿が望み求めたものではなかつた。その申し入れをなしたのは、崔造の方であつた。『權載之文集』卷四十二に「崔左司書」と題する文が附録されている。それがその求婚の書である。同文はまた『全唐文』卷四三四に「与権徳輿書」と題して収載されている。崔造の文集は伝わらない。『全唐文』は『權載之文集』からこの一文を得たのであろう。⁽⁶⁾

崔造の書は「造白す。僕嘗て以へらく、道喪はれて日久しく、君子に見ふこと罕なし。」と書きはじめる。今の若い者に疎なやつはいない。世のおとなが抱く永遠の不満である。まして大乱を経験したあとであれば、道が失なわれたという認識には切実なものがあつた。そのようななかで権徳輿と邂逅する機会を得た。道徳のことについて議論がおよん

だ。若い權徳輿の深い識見と明朗な性格に接して、崔造は喜んだ。久しく逢うを得なかつた君子に出逢つたのである。「其の慰めらること盛んなり。寤寐自ら賀す。」と述べている。

かく心に深く感じ、義に多くかのうた出逢いを得たとき、いにしえの賢人はどうしたか。「或は之を約するに朋友を以てし、或は之を申ぶるに婚姻を以てし、之を聚むるに里閭を以てし、之を悦ぶに宴好を以てす。一日の合をして、累世の歛と為さしむ。裔嗣流を承け、清風自ら遠し。」要

するに婚姻を結んでよしみを通じ、一日の喜びを永遠のものにした。かくて、かねて自分もそうしたいと思い、二三の友人と、きっとそうしようと約束もしている。

そこで、「息女一人、姿性義に及ぶ。靜約を以て尚と為し、琴書を以て適と為す。こひねがはくは以て君子の好を承け、有道の室に備ふべし。長女は先に故の司徒の元子、宏農の楊宏微に約す。幼女は未だ笄せず。願はくば德嗣を繼がん。北帰の日、敬しみて嘉命を俟たん。」崔造は自らの次女を權徳輿の嫁にどうかという。そうすることが、いにしえの賢人と同じ道を踏むことであつた。

博陵の崔氏は大族である。唐が興つてより以来、玄宗朝末期の大乱に至るまで、大族が同じ生活基盤を持つ他の大

族と婚姻集団を形成し、中世的社會を構築してきたことは、周知の歴史事実である。しかし状勢は大きく転換しつつあつた。寒門の子弟にして実力ある者の進出を、社會は漸く許しつつあつた。弘農の楊氏は漢以来の大族である。崔造が長女と楊宏微をすでに婚約させているのは、旧態を踏襲したものである。一方で、次女を寒門出身の權徳輿に嫁がせようとする。時代を先取りした試みである。權徳輿への求婚は、ある意味で、崔造のきわだつた平衡感覚を示しているともいえる。

權徳輿は崔造に見込まれた。そこには崔造一流の打算がはたらいていたかもしれないが、ここでは道をふまえた權徳輿の人格に触れたことが求婚という行動をとらせている事実により重要な意味がある。權徳輿の「左司崔員外に答ふるの書」(集卷四二)は、その崔造の求婚の書に答えた書簡である。

權徳輿、器用瑣薄、他の才術無し。徒だ木訥の姿を以て、聖賢の訓を翫習するのみ。嘗て以為へらく、大和久しく散じ、世道交ごも喪ふと。師友の義缺ぎ、醜薄の風起る。蚩蚩たる万情、司南する所無し。憤を銜み懷を結び、怒然として終日す。

權徳輿の崔造に対する返辞は、かく書き始める。「器用

瑣薄、他の才術無し」、もとより謙遜である。上位者への礼である。そしてそれはまた、「徒だ木訥の姿を以て、聖賢の訓を翫習するのみ」という、次の記述への用意であった。木訥であること、聖賢の訓を翫習するよりほかに何もない得ないこと、それは肯定されることであって、自己の立場の明確な主張であった。かくて「大和久しく散じ、世道交ごも喪ふ」という、崔造と同じ現状認識を持つて世を憂う。權徳輿は年少者である。したがつて道の衰退は師道の欠落をもつて意識され、指南するところなしと慨嘆するのである。書は続く。

前年、得て以て行役し、徳容に覲あおふを獲たり。泛愛を蒙り、竟に清議に接す。初め当世の理要を論じ、次いで情性の大端を陳べ、終に道徳の原極を語る。百慮を澡雪し、泊然として眞を葆つ。一たび至論を聞き、神開き意警す。虛白を覚えず、澄曠四支に浹治す。則ち易直子諒、又た其れ細やかなり。

行役による旅が、崔造との邂逅を設定した。初めての出逢いで、政治の問題、人間存在の問題、そして道徳の問題が議論された。崔造の持論は鬱々とした權徳輿の心を、潤然として開かせるものがあった。「易直子諒」は『礼記』に見えることばである。その樂記篇に「樂を致して以て心

を治むれば、則ち易直子諒の心、油然として生ず。」とある。要するに優しい慈愛に満ちた心である。權徳輿は崔造の識見と人間性に深い敬慕の念を抱いた。「此の時に当たりて、誠に門弟子の数に備へ、嚴師の敬を展べんと欲す。」とこの文を続けている。

崔造の書には退隱の意志を表明した部分があった。罪を得て政治がうまくいかぬ。息女の婚姻をかたづければ隠退したいというものであった。權徳輿の文は、以下に出處進退についての議論を展開するが、いまはこれを略す。求婚に対する返辞には次の如くいう。

また示問の中、情旨備至す。弱植を棄てず、申ぶるに嘉姻を以てす。荀陳の義は、敢へて當る所にあらず。況んや司徒の令子を後と為し、名輩・精識・洞鑒、誠に己に之を得るをや。鄙人何んぞ後として此の命に當るに堪へん。門閨の下、珉玉倅しからず。將た何を以てか祇承せん。厚意は叔宝・逸少の目に當る。清德を累はすを恐る。下情に任ふる無し。已に諮詢に具す。敬しみて嘉命を承く。尋いで拝謝を冀ふ。感慶伏深。謹んで狀す。權徳輿はしきりに謙遜する。辞讓の心を示す。「荀陳德星」は『蒙求』の標題である。後漢の陳寔は清高の徳をもつて聞えた人である。荀淑もまた同じい。あるとき陳寔が

諸子姪とともに荀淑父子に到つて討論すると徳星があつたので、太史が五百里内に賢人の聚まるあらんと奏したという。先に崔造は権徳輿との交際をこの荀陳の義に擬したものである。それをそのままに承けるのはおそれおおいことである。そしてまた、権徳輿は楊宏微との関係に格別の配慮をはらう。楊氏は名門である。同列に排せられることに、おそれを抱かないわけにはいかない。「叔宝玉潤」・「逸少傾写」も『蒙求』の標題である。晋の衛玠（字は叔宝）は、幼にして器量人品衆に優れ、当時の人々はこれを珠玉に譬えたという。同じく晋の王羲之（字は逸少）は、謝安・謝万の二者を尊敬し、その来るや最高のもてなしをしたという。崔造の自分に対する評価と待遇はこれに類する。権徳輿は恐懼する。恐懼しながら、この求婚を敬して受け容れたのであった。

権徳輿と崔氏の結婚がいつであったか、正確にはわからぬ。行役による旅が崔造との出逢いの契機をつくったことはすでに述べた。権徳輿の役人生活の始まりが、淮南黜陟使韓洄の従事となつた建中元年（七八〇）にあることも述べたとおりである。当然、結婚はそれ以降数年のちであった。徐松の『登科記考』は元和二年（八〇七）の進士及第者に権徳輿の一子権璵の名を列する。『永楽大典』が引くと

ころの『嘉定鎮江志』の記載に依る考証である。^⑯ 権徳輿の詩にこのときの権璵の及第を祝つた作品がある。その「南園の新亭に宴会す。璵の新たに第せられ慰慶するの作に酬ゆ。時に賓客に任せらる。」（集卷一〇）詩に、「男兒纔に弱冠射策幸に名を成す」の句がある。権徳輿は元和元年（八〇六）十二月、兵部侍郎から吏部侍郎に転じ、そしてまもなく事に坐して太子賓客に改められている。嚴耕望の『唐僕尚丞郎表』はその太子賓客を元和二年のこととし、徐松の考証と符号する。要するに元和二年に進士に及第した権璵の年齢は、成人したばかりの二十歳であった。したがつて権徳輿の結婚はこの年から逆算して、すくなくとも二十一年以前、貞元二年（七八六）以前に求めることができる。さらにまた、崔造が貞元二年正月、同中書門下平章事に拜せられたこともすでに述べた。時に権徳輿はこれを賀して「外舅崔相国を賀するの書」（集卷四二）を書いている。貞元二年正月、崔造はすでに外舅であった。また「県君興慶宮に赴いて朝賀し、載之冊札を奉行す。因りて即事を書す。」（集卷一〇）詩には、「合^ゑ文^ゑ交歛して二十年 今朝翼を比べて共に天に朝す」と詠う。妻の崔氏が県君に封ぜられた年は、「元和元年恩を蒙り、成紀県伯に封ぜらる。時に室中は安喜県君に封ぜられ、感慶兼懷す。聊か賀を申べて

贈る」(集卷一〇)詩の詩題が明確に示す。すなわち元和元年(八〇六)は結婚以来二十年を経た年であった。あるいは「二十年」は大数かと思われるが、もとより大きな差異はない。つまるところ権徳輿の結婚は、貞元二年(七八六)ないし貞元元年(七八五)、より有力には貞元元年に求めてよいであろう。時に権徳輿は二十七歳。崔造の書に「未だ笄せず」と書かれた崔氏もすでに笄礼をおえて成人していた。古礼にしたがつていえば、女子は十五にして笄して許嫁し、二十にして嫁す。崔氏の結婚は礼にのつとったものであったと考えてよい。

三

権徳輿の贈婦詩は、さながらにこの人の履歴書である。多様な累遷のそのおりに妻への贈詩をとどめている。

結婚後しばらくして、権徳輿は江西觀察使李兼の判官となつた。「祇役江西路上以詩代書寄内(江西路上に祇役し、詩を以て書に代へ、内に寄す)」(卷一〇)は赴任の途次に崔氏に贈つた詩である。

辛苦事行役 辛苦して行役を事とし

風波倦晨暮 風波は晨暮に倦む

搖搖結遐心 搖搖として遐心を結び

靡靡即長路

靡靡として長路に即く

別來如昨日 別來 昨日の如きも

毎見缺蟾兔 每に蟾兔の缺くるを見る

潮信催客帆 潮信は客帆を催し

春光變江樹 春光は江樹を変ず

宦遊豈云愜 宦遊豈に愜しと云はんや

帰夢無復數 帰夢復た数ふる無し

愧非超曠姿 愧非超曠姿

循此跼促步 循此跼促歩

笑言思暇日 笑言思暇日

規勸多遠度 規勸 遠度多し

鶻服我久安 鶻服は我れ久しう安んじ

荆釵君所慕 荆釵は君の慕ふ所

伊予多昧理 伊れ予は昧理多く

初不涉世務 初めより世務に涉らず

適因靡腫材 適たま靡腫の材に因りて

此に嬾慢趣 此に嬾慢の趣を成す

一身常抱病 一身は常に病を抱き

不復理章句 復た章句を理めず

胸中無町畦 胸中に町畦無く

物と且く忤ふ 且く忤ふこと多し

既非大川櫛
則守南山霧
胡為出處間
徒使名利汚
羈孤望予祿
孩輝待我餉
未能即忘懷
恨恨以此故
終當稅韁鞅
豈待畢婚娶
如何久人寰
俛仰學拳措
衡芽去迢遙
水陸両馳驚
晰晰窺曉星
塗塗踐朝露
靜聞田鶴起
遠見沙鵠聚
怪石不易躋
急湍那可泝
漁商聞遠岸

既に大川の櫛に非ざれば
則ち南山の霧を守る
胡為れぞ出處の間
徒らに名利をして汚さしむ
羈孤は予が祿を望み
孩輝は我が餉を待つ
未だ即ち懷を忘る能はず
恨恨たるは此れを以ての故なり
終に當に韁鞅を稅くべし
豈に婚娶を畢へるを待たんや
如何んぞ人寰に久しうし
俛仰して拳措を学ばん
衡芽去ること迢遙にして
水陸両つながら馳驚す
晰晰たる曉星を窺ひ
塗塗たる朝露を践む
静かに田鶴の起つを聞き
遠く沙鵠の聚まるを見る
怪石躋るに易からず
急湍那んぞ泝る可けん
漁商遠岸に聞こえ

烟火明古渡
下碇夜已深
上碇波不駐
畏途信非一
離念紛難具
南方出蘭桂
帰日自分付
北窓留琴書
無乃委童孺
春江足魚鷹
彼此勤尺素
早晚到中閨
怡然兩相顧
權德輿は自身で任地に赴いた。妻子を家に残してきたつ
らさと旅のけわしさを、ねんごろに訴える。質素な生活の
中に安らぎを求める生き方こそ自分にふさわしい、と平生
の心を吐露する。いま行役の辛苦をなめるのはすべて家族の生活のためであるという。詩中に「春江、江樹を変ず」
・「春江、魚鷹足る」の句があり、「沈席 餘清有り」の句

烟火古渡に明るし
碇を下すに夜已に深く
碇に上るに波駐まらず
畏途は信に一に非ず
離念は紛として具へ難し
南方 蘭桂を出だす
帰日 自ら分付せん
北窓に琴書を留む
乃ち童孺に委ねる無からんや
南方 蘭桂を出だす
帰日 自ら分付せん
北窓に琴書を留む
乃ち童孺に委ねる無からんや
南方 蘭桂を出だす
帰日 自ら分付せん
北窓に琴書を留む
乃ち童孺に委ねる無からんや
春江 足魚鷹
彼此 尺素に勤めん
早晚 中閨に到りなば
怡然として両つながら相顧みん

がある。その季節はあるいは晩春のことであつたか。「孩
稚、我が餌を待つ」の句があり、「乃ち童孺に委ぬる無か
らんや」の句がある。一子権璵がすでに生まれて崔氏のも
とにあつた。とすれば、すでに述べた権徳輿とその周囲の
人々の経験からして、この行役による旅は、貞元二年ない
し三年の春のことであつたといえようか。

三十韻六十句からなるこの長篇の終りにあたり、権徳輿
は「春江 魚鷹足る。彼此尺素に勤めん。」と詠する。春
の川には魚も鷹も多いことゆえ、おまえもわたしもせつせ
と手紙を書こうぞ、というのである。初めての別離による
感傷がそういわしめたのであろうけれども、この決意に偽
りはなかつた。その後もしばしば詩をとどめて崔氏への思
いを詠じている。

夜泊 懐有り (卷一〇)

棲鳥	前林に向ひ
暝色	寒蕪に生ず
孤舟	去り息まず
衆感	一途に非ず
川程	方に浩森たり
離思	紛として鬱紆たり
転枕	睡未だ熟せず

擁衾涙已濡
衾を擁いて涙已に濡ふ

寢然風水上
寝然風水上

寝食疲朝晡
寝食朝晡に疲る

心想洞房夜
心想洞房夜

知君還向隅
君もまた隅に向ふを知る

暮色のたちこめた寒々とした冬景色。孤舟は去りやまず
万感がこみあげる。はてしもない舟旅に、別離の悲しみは
いやまさる。転展反側、枕を移して眠られず、衾を抱いて
涙にくれる。苦しみ多い旅に、寝ても食べても朝夕に疲る。
しみじみと思う、おまえもまた部屋の隅で、さぞや悲しみ
にくれているであろう。江西觀察使の従事となつた権徳輿
は役目をおびた旅をしばしば余儀なくされた。「江城夜泊
寄所思(江城に夜泊し思ふ所を寄す)」(集卷六)・「清明日
次弋陽(清明の日弋陽に次る)」(集卷一〇)・「自桐廬如蘭
溪有寄(桐廬自リ蘭溪に如リ寄する有り)」(卷一〇)などは
みなその途次に記したものであるが、行役の苦しみを、別
離の悲しみを詠じ、空闊に一人悲しむ妻に思いをはせたものばかりである。

相思樹 (卷一〇)

家遠江東道	家は遠し 江東の道
身對江西春	身は對す 江西の春

空見相思樹 空しく相思樹を見

不見相思人 相思の人を見ず

相思樹は和名なんばあづき。むかし人ありて辺塞に没す。その妻これを思い、相思樹のもとに哭して卒したという。相思樹を詠すればおのずから主題はきまる。それにしても、権徳輿は妻に対する思慕の情をかくさない。深い愛情を、憚ることもなく直接的に表現してやまないのである。

四

貞元八年（七九二）正月、権徳輿は徵されて太常博士となつた。すでに述べた通りである。時に三十四歳。権徳輿は妻子をひきつれ、室を擧げて上京の途についた。生まれ育つた江南を離れ、長安に移動したのである。

初めて入内してより後の官界生活がきわめて順調であつたことも、すでに述べた通りである。貞元十年（七九四）三十六歳の四月には起居舎人に転じ、次いで中書舎人となつて、あしかけ九年にわたって詔勅の起草にあつた。貞元十八年（八〇二）四十四歳の春には中書舎人をもつて貢士をつかさどり、追つて礼部侍郎に挙せられた。以降貞元二十二年（八〇五）七月までこの任にあり、その間あわせて三回にわたつて貢舉のことを知した。李翊・王涯・白居易・元

稹・李宗閔・牛僧孺・楊嗣復らの多数の面々が、権徳輿のもとで進士科あるいは拔萃科等の及第者となつてゐる。同年七月戸部侍郎、元和元年（八〇六）四十八歳の十二月には兵部侍郎を経て吏部侍郎に転じた。まことに王道を行くがごとき堂々たる官歴である。事に坐して地方に貶謫されるという官界の常識は、ここにはない。したがつて妻崔氏との別離もない。しかし、江西で詠つた崔氏への熱い思いは、温かい愛情は、消えることなく燃え続けた。禁中に宿直するそのわずかな別離にも、権徳輿は崔氏に詩を贈る。「病中寓直、代書題寄（病中寓直し書に代へて題して寄す）」（集卷一〇）・「太常寺宿齋有寄（太常寺に宿齋し寄する有り）」（同）・「中書宿齋有寄（中書に宿齋し寄する有り）」・（同）「中書夜直寄贈（中書に夜直し贈を寄す）」（同）・「端午日、礼部宿齋、有衣服綵結之観、以詩還答（端午の日に礼部に宿齋す衣服綵結の観有り詩を以て還答す）」（同）・「冬至日宿齋、時郡君南内朝謁、因寄（冬至の日宿齋す時に郡君南内朝に謁す因りて寄す）」（同）「奉使豐陵、職司鹵簿、通宵涉路、因寄内（使を豊陵に奉じ、齒簿を職司す。通宵路を涉る。因りて内に寄す。）」（同）すでにこれらの詩題の中に、権徳輿が贈詩に精励する姿が彷彿とされるであろう。以下にはじめの二首を見ておくこととする。

病中寓直代書題寄

愚夫何所任 愚夫 何んぞ任する所ぞ
多病感君深 多病にして君に感ずること深し

自謂青春壯 自ら謂ふ 青春の壯と

寧知白髮侵 寧んぞ知らん 白髮の侵すを

寢興勞善祝 寝興 善祝に勞れ

踈嬪愧良箴 跡嬪 良箴に愧づ

寂寞聞宮漏 寂寞として宮漏を聞く

那堪直夜心 那んぞ直夜の心に堪へん

詩中に「青春」の語があり「善祝」の語がある。太常博士となつて入内したときの作であろう。自分一人では何もできぬ。まして病氣がちの身には君に感謝することが多い。自分では若いつもりでも、やがて白髮はいやがうえにも増えてくる。寝ても起きても太常の勤めに疲れはてているが、ものぐさな性格には君の箴言がありがたい。ひつそりとした禁中にただ宮漏の音だけを聞く。どうして宿直の夜のさみしさにたえられよう。崔氏は賢明な婦人であった。病氣と勤務に疲弊した權徳輿は、その崔氏に寄り掛かる。

太常寺宿齋有寄

転枕排燈候曉雞 枕を転じ燈を排して曉雞を候つ

想君応嘆太常妻 想ふ君応に太常の妻を嘆ずるなるべ

長年多病偏相憶 長年多病にして偏に相憶ふ
不遣帰時醉似泥 帰時をして醉ひて泥の似くならしめ

じ

むかし後漢の周沢が太常となつた。潔斎して宗廟に奉仕する神職である。たまたま斎宮に病臥したところ、その妻が周沢の老病を哀れんで慰問した。周沢は妻が斎禁を破つたと怒り、これを獄に送つて謝せしめた。時は世に最もつまらないのは太常の妻で、一年三百六十日のうち三百五十九日は潔斎して妻を近づけず、たつた一日のみそぎをしないときは酔つて泥のごとくである、といったという。『後漢書』卷一〇九周沢伝に見える有名な故事である。潔斎して宿直をした朝、夜が明けるのをまつころおい、しみじみと、君がまさしく太常の妻であることを嘆じてゐるであろうと想う。長年病氣がちであつたが一途に思い続けてきた。家に帰る時には、酔つて泥のようにならないようにしよう。

權徳輿の贈婦詩は、常に戯れの心がなく、真面目である。温和な人柄がよく現われている。それは李白の「贈内」詩が、

三百六十日 三百六十日

日日醉如泥　日日醉ひて泥の如し
雖為李白婦　李白の婦と為ると雖も
何異太常妻　何んぞ太常の妻に異ならん
と詠う飄逸な趣と比較すれば一層明らかである。

酬九日　九日に酬ゆ

重九共遊娛　重九　共に遊娛す

秋光景氣殊　秋光　景氣殊なれり

他時頭似雪　他時　頭は雪の似くなるも

還対插茱萸

還た対して茱萸を挿さん

比較的に若い頃の作であろう。重陽の節に連れだって共に高きに登って遊ぶ。おりから秋の気配はまことによし。

時がたって白髪になつても、またつれだつて茱萸くわみを挿そ、うと詠う。夫婦和睦のさまを彷彿とさせる。後年台閣に重きをなすと、長寿酒を下賜されたことがあつた。その時の作には次のようにいふ。

勅賜長寿酒　長寿酒を勅賜さる

因口号以贈　因りて口号して以て贈る(集卷一〇)

恩霑長寿酒

恩は霑あらはふ　長寿の酒

帰遣同心人

帰りて同心の人へ遣らん

滿酌共君醉

満酌君と共に酔えば

一杯千万春

一杯　千万の春

もはやくどくどしい説明を要しない。權徳輿は事あるたびに、贈詩という後世にも残る手段を用いて、不变の深い愛情を確認するのである。崔氏に示されたこのような深い愛情は、もとよりその子女に対しても注がれる。

新月与兒女夜坐　新月に児女と夜坐し

聽琴挙酒　琴を聴き酒を挙ぐ

泥泥露凝葉　泥泥として露葉に凝り

騷騷風入林　騷騷として風林に入る

以茲皓月円　茲の皓月の円かなるを以て

不厭良夜深　良夜の深きを厭はず

列坐屏輕簾　坐を列ねて輕簾を屏し

放懷絃素琴　懷を放ちて素琴を絃く

兒女各冠笄　兒女　各おの冠笄し

孫孩遡衣襟　孫孩　衣襟に遡る

乃知大隱趣　乃ち知る　大隱の趣

宛若滄洲心　宛も滄洲の心の若し

方結偕老期　方に結ぶ　偕老の期

豈憚華髮侵　豈に憚からん　華髮の侵すを

笑語向蘭室　笑語して蘭室に向へば

風流伝玉音　風流れて玉音を伝ふ

愧君袖中字 君が袖中の字

価重雙南金 価は雙南金より重きに愧づ

詩は、明月の夜に宴を催し、一家団欒の一時を持ったことを述べる。弾琴の音を聴き、酒を飲む。児女は冠笄し、孫孩は襟元にまとわりつく。陶然として実感する平和に、世俗をつかの間わすれ、そこに桃源の境界を見出す。かくして偕老を誓うのである。

覽鏡見白鬚 鏡を覧て白鬚數茎

數茎光鮮特異 光鮮特異なるを見る（集卷一）

秋來皎潔白鬚光 秋来皎潔 白鬚光る

試脱朝簪学酒狂 試みに朝簪を脱ぎて酒狂を学ぶ

一曲酣歌還自樂 一曲酣歌して還た自ら樂しむ

兒孫嬉笑挽衣裳 児孫嬉び笑ひて衣裳を挽く

秋になって白く輝くひげを認めた。そこで醉狂に醉払い

のまねをしてみる。酒を飲み歌をうたって楽しむ。こどもたちが面白がって着物にまといつく。好好爺である。まことに家庭的である。「図書伝授の處、家に一男児有り」（集

卷一 南亭晚坐因以示璵）の句では一子權璵を直接教育した跡を窺わせ、「男児纔かに弱冠、策を射て幸に名を成す」（前出）「爾の府中に趨るを見る、初官 吾れを慰むるに足る」（集卷一 琥授京兆府參軍戲書以示兼呈独孤郎）の句では權

璵の進士及第と任官に対する喜びをかくさない。

憲宗の元和元年（八〇六）四十八歳の十二月、吏部侍郎に挙せられると、權德輿は成紀県伯に、崔氏は安喜県君に封ぜられた。これを慶賀して「元和元年蒙恩封成紀県伯、時室中封安喜県君、感慶兼懷、聊申賀贈（元和元年恩を蒙りて成紀県君に封ぜらる。時に室中は安喜県君に封ぜらる。感慶兼懷し、聊か賀を申べて贈る）」（集卷十）および「県

君赴興慶宮朝賀、載之奉行冊札、因書即事（県君興慶宮に赴いて朝賀す。載之は冊札を奉行す。因りて即時を書す）（同上）の二詩の贈詩がある。前詩は五言律詩であり、後詩は七言律詩である。おののその尾聯には「更に県車の時を待ちて、君と暮歎を歎ばん」「相期す偕老宜家の処、鶴髮魚軒更に憐む可し」と偕老同穴を期して一篇を結んでいる。

元和五年（八一〇）五十二歳の九月、權德輿は礼部尚書同中書門下平章事となり、宰相の任にあたった。元和八年（八一三）五十五歳の正月、相を罷め、同年七月、檢校吏部尚書をもつて東都留守となつた。任地は洛陽である。じつに貞元七年に太常博士となつて以来二十三年にしてはじめて長安を離れることになった。長安出発にあたり、時に崔氏は病床に臥していた。崔氏はおくれてあとを追うことに

なり、權徳興は先に任地に赴いた。わずかの間とはいえ、予期せぬ別離がおとづれたのである。「貞元七年、蒙恩除太常博士、自江東来朝、時友郡君同行西岳廟、停車祝謁、元和八年、拜東都留守、途次祠下、追計前事、已二十三年于茲矣、時郡君以疾恙統発、因代書却寄（貞元七年、恩を蒙りて太常博士に除せられ、江東自り来朝す。時に郡君と同に西岳廟に行き、車を停めて祝に謁す。元和八年、東都留守に拜せられ、途に祠下に次る。前事を追計するに、已に茲に二十三年なり。時に郡君は疾恙を以て統ぎて発す。因りて書に代へて却て寄す。」（集卷十）という長い詩題の詩はその時の作である。三十韻からなる長篇をここに掲げる。余裕はすでにはないが、その内容は篇題に明確に示されてい。る。はじめて江東より上京をはたしたとき、崔氏と共に華山の廟に立ち寄った。いままた二十三年ぶりに同じ所を、一人で通りかかる。詩は昔時の思い出を語り、これまでの歩んで来た道を回顧する。そしてまた崔氏の身を案ずる。顛別亦不易 脣くの別れも亦た易からず 沈痼 今未痊 医方驗桐君 医方は桐君に驗し 道術依竺乾 痘瘍は竺乾に依る 庶憑神明佑

得使疾恙蠲 疾恙をして蠲えしむるを得ん
藥術診切の医工輔氏と、持念精至の大比丘尼優曇とを崔氏に同行させることになつてゐるとは自注にいうところであるが、その配慮に加えて神明の佑助をかりて治癒してほしいと悲痛な願いを述べる。かくしてこの詩の終尾は、殷懃俟來報 殷懃に來報を俟つ
涙墨書此篇 涙墨もて此の篇を書す
と詠じて一篇をとじる。
洛陽に向う同じ道中で、權徳興はいま一篇の詩を崔氏に寄せてゐる。
発峠石路上 峠石路上を發して
却寄内 却て内に寄す
莎柵東行五谷深 莎柵に東行すれば五谷深し
千峯万壑雨沈沈 千峯万壑 雨沈沈
細君幾日路經此 細君幾日か路して此を經
応見悲翁想望心 応に見るべし悲翁が想望の心
長安から洛陽に向う道は険しい。ことに峠石のあたりは荒漠とした峡谷がえんえんとうち続く。おりから山々に雨は降りしきつてゐる。君はなんにちすればここを通るだらうか。そのときこの悲しみにみちた翁が待ち望んだ心がわかるにちがいない。

權德興はこのあと翌元和九年（八一四）十月、太常卿に除せられて長安に帰京している。元和十年（八一五）刑部尚書をもつて山南西道節度使となり、再び長安を出でている。元和十三年（八一八）六十歳の八月、病をもつて帰還を乞い、その道中に卒した。贈尚書左僕射。

『新唐書』の權德興伝には權璡の伝を付し、宰相李宗闕は乃ち父の門生なり。故に薦して中書舍人と為す。（中略）宗闕の貶せらるるに及んで、璡は屢しば表して弁解し、閬州刺史に貶せらる。文宗其の母の病なるを憐んで、鄭州に徒す。

とある。崔氏は長命を保ち、文宗朝（八二六～八四〇）まで生きていたようである。

嘉詩にはじまる歴代の贈婦詩に啓発されるところ少なくなかつたであろう。しかしながらそれでもこれを多作せしめた最もな要因は、權德興自身の恩和な性格から発する、崔氏に対する細やかで深い愛情にある。その意味で、この詩人には「愛妻詩人」あるいは「愛情詩人」の敬称を贈つてよいであろう。そしてまた、贈婦詩の受け手である崔氏の賢明さも、これに加えておかなければならぬ。權德興が崔氏に示す愛情の中には「踈嬪 良箴に愧づ」の句に見られるように、明らかに尊敬の念がある。あるいはまた「君が袖中の字、儘は雙南金より重きに愧づ」の句に示されるように、崔氏もすぐれた詠み手であった。良き相手を得てこそ詩情は増すのである。

ところで、ひとたび入内してよりのちの權德興が、ほとんど左遷の憂き目を見ることなく、着実に位階を登りつめていった足跡は、一つの不思議とさえいえるであろう。いかにしてそれが可能であったか。韓愈が前掲の碑文で「其の設張拳措する所、必ず寛大に本づいて、以て教化を幾ひ、助与する所多し。維れ調誤を匡して、其の正を失なはず、和節に中つて、声章を為さず。善に因り賢に与して、矜つて己れを主とせす。」「六官に流連して、屏毗に出入す。党無く讎無く、世を挙げて疵むこと莫し。」というよう、この総集を愛読していた事実はまぎれもない。蘇武詩・秦

寛大を根本として正道をうしなわず、自己を宣伝主張せず、円満な人格をもって勤め、一党一派にかたよらなかつた身の処し方が、それを可能にした最も大ききな要因である。そして、温良恭儉讓を以て精勤する權徳輿のそのような生き方あるいは性格は、崔氏に対する贈婦詩の中で見事に実証されるのである。

註

- ① 魏頴の「李翰林集序」（全唐文三七三）に「白始娶於許。生一女二男。曰明月奴。女既嫁而卒。又合於劉。劉訣。次合於魯一婦人。生子。曰頗黎。終娶於宋。」とある。
- ② 平岡武夫氏「白居易とその妻」（東方学報京都第三十六冊）
- ③ これまでに權徳輿を論じたものとしては西脇常記氏の「中唐の思想—權徳輿の周辺—」（中国思想史研究2）、拙稿「權徳輿と仏教(1)」（文芸論叢第二〇号）がある。本稿の伝記部分は多く拙稿「權徳輿と仏教(1)」によった。
- ④ 權徳輿の伝記の根本資料としては、韓愈の「唐故相權公墓碑」（韓昌黎集卷三〇）・『旧唐書』卷一四八の本伝、『新唐書』卷一六五の本伝、および楊嗣復の「權載之文集序」（權

- ⑤ 李華の「著作郎贈秘書少監權君墓表」（全唐文卷三二一）に「大曆元年四月某日、不幸逝於丹徒。因殯焉。享齡四十二。（中略）夫人隴西李氏。仁賢。有一子某。生七年矣。」とある。
- ⑥ 権臯はその母の死後、起居舎人と著作郎と、二度招かれたが病氣で辞退した。前掲李華の墓表、清水茂氏の訳注参照。
- ⑦ 標点本『新唐書』卷七十二下校勘記参照。
- ⑧ 『新唐書』卷一五〇崔造伝に「貞元二年、以給事中同中書門下平章事。」とある。
- ⑨ ただし大興朱氏刊本（四部叢刊所収本も同じ）とは別系統のものか。文字に多少の異同があるほか、『全唐文』では文末の「三月二十一日」の日付が脱落している。
- ⑩ 『嘉定鎮江志』卷一八には「璵字大圭。徳輿子。元和二年登進士第。歷監察御史。中書舍人。劾李訓、賊閩州刺史。文宗憐其母病、徙鄭州。』とある。